**2016年　7月24日　メッセージ要旨**

**ロブベル牧師のビデオ、“Luggage：旅行かばん”**

**はじめにカール牧師より：**7月7日の夕食に、何を食べたか？　木曜だったが、覚えているだろうか？

三週間前のことでも覚えてないのに、何光年もの前、若かれし頃に起こったことを、なぜ覚えているのだろうか？

７月7日に、魚を食べたか牛肉を食べたか、覚えていないのに、16歳のときに、だれかが自分に何か裏切り行為をしたことを、いかに正確にはっきりと、なぜ覚えているのだろう？

何十年も経ったにもかかわらず、だれにどのように傷つけられたかは、異常なほどに覚えている。　私たちは、何年も前に、そのことはもう仲直りをして、忘れたことにしたのに、また掘り返す。　心の傷が癒されるようにするより、私たちは、その傷をまたむしかえし、あらたに血がにじみでてくるようなことをする。

私たちは、赦したいといは言う。しかし、どうやって赦すのかを知らない。　人生の先に進みたいのに、まずは復讐、ひどい要求をしたいものだ。

日々、私たちは、過去の旅行かばんを引きずっている。　そして、そのかばんの中にある痛み、厳しい感情、怒りを空にしてしまうのではなく、そのかばんの中身を増やしていってしまっている。

過去の痛みをやりすごすこと、過去のことは過去のこととしてしまうこと、置き去りにしてしまうことは、とても難しい。

さあ、私たちの友人、ロブ・ベルが、なにか良い解決方法を示してくれるか、彼のビデオを見てみよう。

**ビデオ鑑賞**

**ロブ ベル牧師のLuggage(旅行かばん)の要旨**

ある友人に彼女がいたが、去っていってしまった。彼の方は、いずれ彼女は帰ってくると信じていたが、その気配はなかった。ある女性の友人は、義理の家族とは考え方が異なりうまく行かず、いつも意地悪な感情を持たれてしまう。

ほとんど、だれもが、心に傷を負っている。その傷を乗り越えられる人もいるが、多くの人は根深く、重い傷を抱えている。思春期のころ、ある友人は、ぽつっと「私はレイプされた。」ともらした。

私たちは、どうしてそんなことになってしまったのかと話しあう。しかし、望むことは、深い傷から解放されたい。　私たちは心広く、健康的で、すこやかでありたいと思うのだが。

私は、だれかが自分にしたことによって、それが私の生涯を決定しまうようなことにはなって欲しくないと言う。あなたならどうだろう？

それは大きなことか、あるいはどうでもいいことなのかもしれない。だれか、あなたが好きだと思っていた人が、あるいは、今も好きだと思っているだれかが、あなたから去っていったり。

ビジネスのパートナーが、大金を持ち出してしまったとか。　あるいは親戚のだれかが、あなたを裏切ったとか。　友人があなたを拒絶するようになったとか。

そのようなことがあると、そのことを考えないようとする、しかし、考えないようにすると、ますますそのことをもっと考えるようになってしまったりする。過去のことにしてしまいたいと思うが、いったいどのようにしてそんなことができるのだろうか？

一度は、もう過去の事になったとしても、その人にもう一度、会ったりする。あるいは、そのことを思い出させるなにかかが起こってしまうと、すべてが元に戻ってしまい、最悪の心境になってしまう。傷口はまた開いてしまい、これまで以上に痛んだりしてしまう。

何日か、何週間か、あるいは10年たった後でも、傷はあなたの一部になってしまう。振り落としたり、過去に置き去りしてしまうことができない傷。ついには、仕返しが、唯一の希望になってしまったりもする。私たちは、過去の痛みから解放されることにならない。

あなたがどんな傷を負っているのか、それがどれほどの痛みを伴っているのか、それはわからない。ここで、私は、その傷を負ったとき、いったい神はどこにいたのか、と聞きたい。

詩編によれば、「御目は国々を見渡す。(詩編66:7)」と詠われている。また箴言には、「どこにも主の目は注がれる。(箴言15:3)」とある。　だからどんな悪いことが起こったとしても、それを神は見てたし、神はそこにいた。

ローマ信徒への手紙12章には、「自分で復讐せず、神の怒りに任せなさい。」とある。しかし、そんなことは簡単にできることだろうか？

復讐こそが、私たちの世界の中にあるのではないだろうか？　復讐したいようなことが起こると、いずれ静かになるからと言われたりする。　私が教えてあげよう、などというなら、彼等は自分で学ぶだろうから、事を大きくしない方が良い、などとも言われたりする。

復讐ということについて、その奥深い、霊的な思いについて考えて欲しい。復讐するということは、神に向かって、「私は、神様、あなたをもう信頼できません。この人は私に悪いことをしました。もうあなたに任せてはいられません。あなたがどうしてくださるのかわかりません。」それは信頼しないどころか、「私が何かされたんだから、あなたが復讐するより、私が復讐したほうが、うまくいくんです。」というようなことを言うようなものだ。

復讐について、その深い意味について話していると、ある友人は私にこんな話をした。「車の中にゴルフボールを入れておいて、だれかが、私に意地悪な運転をしようものなら、ゴルフボールを出して、サンルーフからその車にぶつかって欲しいと投げるんだよ。」

その話を聞いて、みんな笑ったが、実際のところ、復讐という行為は、私たちを満足させるのだろうか？　復讐によっては、なにも満足しないだろう。　復讐して、本当に気持ちがよかった、満足したなんていうことはあるのだろうか？　復讐はうまく働かないのだ。

（空港のバゲッジクレイムの映像）

だから解放はイエスの教えの中で、とても大切なことだ。イエスの教えの中心では、神が私たちの罪を赦してくださったことが語られる。私たちは過去に固執してしまうことないと。

なぜなら、私たちのだれもが、清い手をしているわけではないから。私たちは、みなだれかに悪いことをしているのだ。しかしイエスにあっては、罪の宣告はなく、悪事の箇条書きもなければ、なんの裁きも無い。

十字架とは、あなたの過去の過ちをそのまま保持しつづけるようなことはしませんよ、と神が言ってくださっているようなものだ。ある人々には、神は待ち構えていて、断罪をくだすためにいると思われているかもしれない。

だからたとえ良い行い、赦すという行為をしたとしても、心配に襲われてしまう。　だから、なにか自分に悪いことが起こってしまったときは、神が罰のためにそれを起こさせたと思うかもしれない。すべてが、神の裁きや懲罰なんだと思ってしまう。

そのような神は、決して、イエスが顕してくれた神ではない。イエスが教えてくれている神とは、愛、恵み、憐れみ、赦しに満ちている。　そして、いつも私たちに共にいてくださり、イエスの道こそ、歩むべき道のなかで、最高の道であること示そうとしてくださっている。だから、もしだれかを赦すならば、それは神が私にしてくださったことを、私が今度は、だれかにしていること。

でも、いままで、だれかがこんなことを言うのを聞いたことがあるだろうか。　「彼等が私にしたことは、本当にひどいことだ。　だから、決して、私は彼等を赦すことができない。」もし、同じことを神が言っていたとしたらどうなるだろうか？

こういう人について考えてみてはどうだろう。　いくら赦しても、なんどもなんども私たちに繰り返し、傷つける人々。　箴言(26:11)には、こんな言葉がある。「犬が自分の吐いたものに戻るように、愚か者は自分の愚かさを繰り返す。」

ある人々は破壊的であり、有害で、繰り返し悪いことをする。そしてそのような人々の関係は決して元通りにはならない。そこで、そのような人々とは境界、空間を持たなければならないのかもしれない。また、近くにいてはならないのかもしれない。

なぜなら、赦すということは、必ずしも、忘れるということでない。最も健全な関係は、だれかが傷つけるようなことをしても、それをやり過ごして、たいした問題にもせずに前に進んでいくこと。しかし、場合によっては、離れていくことも必要だ。赦すということは、しばしば、覚え続けることも含んでいる。

つまりある人々は、吐いたものに戻ってくるように繰り返す。だからといって彼等が同じようなことをした際、私たちは同じ場所にいる必要はない。もし彼があなたに痛手を与えており、あなたがののしられているなら、そこから離れる必要がある。現時点で、そこから出ていく必要がある。

なぜなら、ある人々は、有毒であり危険なのだ。そのような人々は自分のした事の成り行き、影響の大きさに直面しなければならない。それによって、神から、彼等の注目を得ることになるのかもしれない。

そう、だから赦すということは、彼等をやりすごすこと、解放すること、そして、復讐などという欲求を断念すること。　そして、赦すということは、究極的には、彼等に幸あれと祈らなければならないし、彼等に良きことが訪れるように、望まなければならない。しかし、自分はとても彼等に幸あれなどとは祈れず、彼等が罰を受ければよいと思ってしまう。とても赦せてはいない。

おそらく、赦すということの本当のポイントは、相手のことではないのだと思う。私たちは、彼等を解放し、やりすごす、ということを話したが、赦すということは究極的には、あなた、自分の、そして私たちの問題なのだと思う。　だれかを赦す、やりすごす、ということは、本当は自分を自由にしているように感じる。

もし、自分がそんな重荷を負い続けているなら、それはみじめな生き方なのだ。あなたがどんな重荷を負っているかは知らないし、その重荷をどの位の期間、負い続けているのか、知らない。でも人生の旅路を歩むにつれ、傷つけられ、重荷を負って歩むのだと思う。

それはどこに行くにも、その旅行かばんを運んでいかなければならないように思える。そして、時間が経ってみると、そのかばんは、さらに重くなっていないだろうか？　そしてその旅路は、くたくたに疲れきってしまう。

神はあなたがたが、そんな旅行かばんを運び続けるために、あなたを創造したわけではない。神はあなたを解放するように創られた。辛らつさから、憤慨から、怒りから、復讐したいという気持ちから、自由にするために。　そして、世界を裁こうとするような思いから解放するために。

ただ、やり過ごしてみたら、どうだろうか？　そのためには、たぶん、何かをしなければならないだろう、電話かけたり、emailだったり、面と向かって話しをする時間を持つ。あるいは、あなた自身の奥底にある堅固な感情に向かって、もう私は、一日たりとも、このかばんを引っぱり続けるようなことはしない、と宣言したらどうだろうか。

それは、やり過ごすという長いプロセスの始りなのかもしれない。でも私たちは、はじめなければならない、赦すということを、今日はじめなければならない。　今はじめなければならない。　赦すということは、行動だ。　あなたが何かをするということ。

あなたが赦されたように、あなたも赦すことができるように。あなたに与えられたものを、あなたが、他の人々に施すことができるように。あなたがだれかを赦すことができますように、あなたが赦されたことをわかったのだから。　今日、それをできますように、なぜなら、もう明日にはそのような機会は訪れないかもしれないから。

**ビデオ終了後、カール牧師より**

ここにいる皆さんの中には、リック・スリーブという方をご存知の方がいるだろう。　彼は、ワシントン州で旅行会社を経営しており、PBS放送に、しばしばゲストとして登場する。　そして、たまたま、彼はルーテル教会の人だ。

彼はいつも旅行かばんを軽くするように勧めている。　大きなスーツケースなどは使うべきではないと。　それは、もちろん、なかに何を入れるかということに注意を払うことである。　三足よぶんに靴を入れる余裕などはないし、5枚の違う種類のセーターなどを入れる余裕もない。

イエスも私たちに、かばんの中身を軽くするようにと励ましてくれているのだと思う。　重くのしかかってきてしまうような余計な傷、痛み、悲しみ、痛手をかばんから取り除くようにと。

さあ、今週中に、ぜひ、かばんに悲痛な悩みをさらにつめてしまうのではなく、空にすることをはじめよう。　過去はもう埋葬してしまおう。昔のことは昔のこととして、運び続けることはなく、過去に置きざりにして良い。あなたに痛みを与えた人のことを赦し、受けた痛みを忘れ、これからは軽やかに歩めるように。神はあなたにそれを望んでいる。

(要約　安達均)